

サン・シランの残像

— 論争における操作と、その展開

野 呂 康

L'Image de Feu Saint-Cyran : Une Stratégie de la Polémique

Yasushi NORO

要旨

ジャンセニスムとは、ベルギーの神学者コルネリウス・ジャンセニウスの名に由来し、主に今日のベルギーとフランスで展開された運動の総称である。ジャンセニウスの遺著『アウグスチヌス』のフランスでの再版と、アントワヌ・アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』の出版を嚆矢として、以後数年に渡る論争の口火が切られた。この初期ジャンセニスム論争は単なる神学の教義論争にとどまらず、故サン・シラン修道院長ことジャン・デュヴェルジェ・ド・オーランヌの像をめぐる、熾烈な攻防戦が繰り広げられた。論争文書を繙きつつ、現代に至るまでジャンセニスム運動の理論的支柱とされるこの人物の像が担った機能を考える。

キーワード：ジャンセニスム、サン・シラン、論争、アルノー、頻繁なる聖体拝領について

論争研究の効用

フランス語で「論争」を意味する *polémique* という語は、ギリシャ語で「戦争に関する、争いの」という意味の「ポレミコス」(*polemikos*)を語源とする。やはりギリシャ語の「衝撃」(*polemos*)から派生した語である。したがって、出来事としての衝撃から産み落とされたテキストは、戦闘の喧騒に満ちている。衝撃があり、すぐさま複数の著者が介入し、時に逸脱するかと思えば、派閥間闘争に発展する。決して妥協のないテキストの交換を通じて、やがて戦争は霧消する。テキストとは戦場であり廃墟である。激しい戦場であったからこそ、廃墟は記録となり、記憶を喚起し続ける。廃墟を直視するわれわれの眼は、えてして可視的な論理に囚われがちだ。だが、諸勢力間の大義や小競り合いに絡めとられず、戦争全体の見取り図を把握する方法はないものか。

本論の目的は、論争の唯一の痕跡であるテキストを手がかりに、その背後に悠々と流れる論争の文脈を探りだすことにある。しかし論争の特徴を列挙し抽象的なイメージを提示しても、論争の見取り図は得られない。本論ではいわゆる「ジャンセニスム」をめぐる初期の論争、それもフランス・ジャンセニスムの理論的支柱とされるサン・シランの ^{イメージ} 像 を焦点とするテキストの「行為」を辿りつつ、論争のあり方を描写することにある。同時に、一つの事例において複数の操作

を観察対象とすることで、最終的に論争研究に固有な価値を確認したいと考えている。

ジャンセニスムの定義と問題¹

ジャンセニスムとは1640年以降18世紀に至るまで、主に今日のベルギーとフランスを中心として展開された運動である。呼称は、ルーヴァンで聖書学を教授していた神学者コルネリウス・ジャンセニウス（1585年-1638年）の名に由来する。ジャンセニウスは1585年に生まれ、ルーヴァンを含む幾つかの地で学業を積む。1609年には、ジャン・デュヴェルジエ・ド・オーランヌ（後のサン・シラン修道院長）と出会い、1616年まで共同研究をしたといわれる。1635年、ルーヴァン大学学長に任命され、同年にはイプルの司教となる。その3年後に死去するが、1640年には友人たちの尽力により、ルーヴァンで遺稿『アウグスチヌス』が上梓される。ルーヴァンのイエズス会士は、この書とジャンセニウスに対して出版前から警戒していたらしい。そのような事情を踏まえながら、翌年フランスの神学者たちは自国において、『アウグスチヌス』の再版を刊行させたのである。イエズス会士を主体とした反対派は様々な手段でこの書を攻撃し、擁護派も反論に努める。その論争の最中、ジャンセニウスの擁護者の一人であったアントワヌ・アルノーは、1643年に『頻繁なる聖体拝領について』を出版する。以上が1640年代前半、ジャンセニスム運動をめぐる論争の概略である。

さて、この時点における「ジャンセニスム」とは何を意味するのか。

ジャンセニスムの定義に関しては、様々な観点から語られてきた。まず現代から回顧的に眺めれば、ジャンセニスムが恩寵をめぐるカトリックの教義論争の一コマであることは間違いない。その他、信仰の実践と道徳における厳格主義や、教会の組織改革に関わる運動であったことも指摘されている²、ジャンセニスムに近代的個の発生と合理的服従のパラドクスを見る精神史研究³もある。ジャンセニスムというテーマ自体が豊饒であるからこそ複数のアプローチが可能なのだが、そこに問題がなくもない。発表媒体（辞書、百科事典、研究書等）の課す制約があるにせよ、それでも従来の研究がことごとく、ジャンセニスムとは何かという本質論に傾いているのは確かである。すなわち、ジャンセニスムを他の思想から分ける特徴を探すために、まずはジャンセニストを特定し、ジャンセニスムの思想や教義の特徴を描き出す。翻って、ジャンセニストの記す教義をジャンセニスムの表出ととらえ、同様の思想を主張する者がジャンセニストとされる。こうした循環論法は、ジャンセニストという作家やジャンセニスムという思想が存在するという本質論が内包する危険性を表している。これに対してベルギーのジャンセニスム研究者リュシアン・セイッサンスは、本質論に由来する矛盾を回避するために、反ジャンセニスムからジャンセニスムを捉えるよう主張していた。我が国では近年、御園敬介氏がセイッサンスの問題提起を受け、反ジャンセニストのモノグラフから逆照射する形でジャンセニスムを捉えるよう、新たなアプローチの提案をしている。⁴

その詳細は省略するとして要点のみ記せば、御園はジャンセニスムとは何かという本質論に陥ることなく、やはりジャンセニスム研究の大家であるジャン・オルシバルが提起した「機能的統一」の側面を強調しながら、それがどのようにつくられたかという「生成」に着目することに研究の活路を見出す。そのために、二つの「視点の転換」を促す。第一に、「関係者の著作をある体系化された理論や立場、方法を示すものとして分析対象にする」静的な理解から、「ジャンセニスムを人為的な産物と見なす立場からすれば、それが極めて早い時期に多様な社団を巻き込んだ政治問題となった歴史を踏まえて……対象の漸次的形成に着目した動的な考察を進める必要がある

ように思われる」。第二に、「従来の研究は、ほぼ全ての場合、迫害された「ジャンセニスト」への着目を起点として行われてきた」のに対し、「ジャンセニズムから反ジャンセニズムへ」視点を転じねばならない、という。⁵

それではどうすれば、「生成」に触れることができるだろうか。ジャンセニズムに実体がなく、それを「概念形成の歴史」として捉えるなら、その語と概念が産み出され用いられる場に立ち会うしかない。すなわち、ジャンセニズムやジャンセニストという語が現れる場面、反ジャンセニスト側から投げつけられ、ジャンセニストの内実が付与されてゆく過程を観察せねばならない。ジャンセニズムという名称が神学者の名に由来し、神学の教義をめぐる論争からこの呼称が現れたのだから、論争を入口として、そこで生産されたテキスト相互の関係性を踏まえながら、論争の展開を記述する必要がある。

「ジャンセニスト」とは誰か

ジャンセニズムの定義に伴う困難は、その信奉者（といわれる人々）の呼称にも当てはまる。サン＝シラン、アルノー、エルマンらは、反ジャンセニスト側から「ジャンセニスト」と名指されたために「ジャンセニスト」となる。そもそも彼らは「ジャンセニウスの徒」なのか、ジャンセニウス主義（そんなものがあるとして）の信奉者なのか、ジャンセニウスの擁護者なのか。この運動の生成過程を考慮しない限り、一般名詞と化したこの語の内実は曖昧なままにとどまる。ジャンセニズムやジャンセニストの思想を自明視することなく、テキストの交換から論争家の表象を、論争家の表象から歴史の或る時点における語の定義と内実を明らかにしなければならない。

本論の関心から言えば、＜サン＝シラン＝ジャンセニスト＞を論の前提とするのではなく、この人物がどの時点でジャンセニズムの首領と見なされるようになったのか、その歴史的経緯を追うことにしたい。ところで17世紀以降、後世の歴史家にいたるまで、ほぼ例外なくサン＝シランをジャンセニストの鼻祖に据えてきたし⁶、それゆえにジャンセニズムの思想なるものを把握するのに、彼の『キリスト教的霊的書簡集』や『平俗神学』に絶えず参照が促される。繰り返しになるが、本論ではサン＝シランがジャンセニストかどうかは問わない。彼が一般化された「ジャンセニズム」なるものの思想的支柱であったかどうかは考察の対象外なのである。そうではなく、サン＝シランがジャンセニストであるのは反ジャンセニストがそう呼んだ時点からであり、そのような呼称ができた瞬間から、サン＝シランがジャンセニズムの思想の体現者とみなされるようになったという事実注目したいのである。サン＝シランがジャンセニズムの首領であるから、ジャンセニズムの教義を彼の著作に求めるというのでは、論点先取りの誹りを免れまい。

論争文書がまずは相手の存在を明示し、論敵を可視化し、集団に形を与える。論争文書に書き込まれるのは、論点である教義の是非や著者の思想だけではない。一例を挙げれば、以下に見るように『アウグスチヌス』を書いたのはジャンセニウスであっても、その再版をフランスで出すというのは、ジャンセニウスの与り知らぬ行為なのである。出版は、著者の意図や思想とは離れた行為となる。それでは論争書と出版の関係に着目すれば、著者とその思想の表明という以外に、どのような文脈が見えてくるだろうか。

フランスにおける『アウグスチヌス』の再版

1638年、イプルの司教であったジャンセニウスは死去する。1640年、ルーヴェンで二人の神学博士がジャンセニウスの遺著である『アウグスチヌス』を出版した。⁷1641年初頭、今度はパ

リにおいて、ミシェル・ソリとマチユ・ギユモという二人の書籍商・印刷業者が共同で『アウグスチヌス』の出版を手がける。⁸同年二人はやはり共同で、フロラン・コンリウスの書も印刷している。⁹コンリウスはアイルランドのチュアムの大司教を勤め、ジャンセニウスとは個人的なつき合いがあり、サン・シランとも交流のあった人物である。コンリウスの書は、ルーヴェンでは既に1624年と1625年に出版されていたが、1640年の『アウグスチヌス』初版に改めて補遺として挿入されていた。¹⁰したがって、ジャンセニウスとコンリウスは以前から思想上の親近性が認めれていたわけで、フランスの神学者が矢継ぎ早に、二人の著作を同じ書籍商に出版させるというのは偶然ではなかった。『アウグスチヌス』のフランスでの再版が、「予め準備された攻撃」¹¹とされる由縁である。フランスにおいて、イエズス会士は神学部に『アウグスチヌス』を検閲させようとした。¹²1643年3月6日、ローマでは教皇勅書「イン・エミネンチ」が準備され、6月19日に交付される。『アウグスチヌス』は恩寵に関する議論を禁じたこれまでの決定に従って断罪されてしまう。

「サン・シランの一派」

それでは『アウグスチヌス』、およびコンリウスの著作を出版したのは、どのような勢力であったのか。従来の歴史家は口を揃えて「サン・シランの一派」とする。確かにサン・シランはルーヴェンでの『アウグスチヌス』の初版を読んでいるし、それに熱狂していたことも伝えられている。だがそれにしても、フランスでの再版をめぐる奇妙な状況は確認しておいて良い。リシュリュが投獄したサン・シランの出版計画に、なぜ敢えて、セギエやリシュリュが最前線にしている書籍商が協力するのか。セギエ御用達の書籍商カルヴィルが、『アウグスチヌス』再版のスキャンダルを知りながら、コンリウスの著作を出版することで「サン・シランの一派」による攻撃に加担するだろうか。ジャンセニウスとサン・シランの交友と思想の親近性に鑑みて、『アウグスチヌス』の再版にサン・シランが関係しているというのにはありそうなことだが、虚心坦懐に事象だけを追うなら、出版をめぐる一連の流れとサン・シランの関係は推測の域を出るものではない。

『アウグスチヌス』の再版後、ルーヴェン同様、パリのイエズス会士も即座に反応した。ところで、当時パリの神学部では、反イエズス会の機運が存在していたことが知られている。サン・シランに関しては、リシュリュを慮ってのこともあろうが、公に彼を擁護する雰囲気は神学部にあったとは考え難いし、テキスト上の裏付けはない。さらにいえば、この出版当時、最良の弟子の一人であるアントワヌ・アルノーは未だ神学博士ではなく、神学部にも属してはいなかった。主著となる『頻繁なる聖体拝領について』を引っさげて華々しく論争に参入するのも2年後の話である。この少し後に、アルノーとその仲間が『イエズス会士の道徳神学』¹³を公にして、フランスのイエズス会士を攻撃していることも、上の見解を補強しているように思われる。それならば、『アウグスチヌス』の再版に続く一連の動きには、「ジャンセニスト」はおろか「サン・シランの一派」の企てよりも、むしろより一般的に、反イエズス会勢力を見るほうが穏当であろう。この点、ルーヴェンとパリの二つの神学部は、完全に歩調を合わせていたのである。

教皇勅書をめぐる論争

教皇ウルバヌス八世はブリュッセルの教皇特使¹⁴とケルンの大使¹⁵を介して、フランスでの騒動を知る。¹⁶ローマでは1641年には、未だ『アウグスチヌス』に関する協議が継続して行われていた。¹⁷フランスでの騒動の解決を図ろうと、ローマはリシュリュに協力を求める。1641年、ジェ

ロム・グリマルディが教皇大使としてパリに送り込まれる。リシュリユは教皇に熱意を示し¹⁸、ソルボンヌの神学博士に協議を命じる。¹⁹当時ジャンセニウスは、フランスの外交政策を批判した小冊子『ガリアの軍神マルス』の著者として知られていた。ところが1642年12月4日にリシュリユが死に、協議は頓挫してしまう。こうして『アウグスチヌス』とそのシンパの著作は、パリの神学部ではさほど大きな反対にあうこともなかった。

1641年8月1日にローマは、『アウグスチヌス』とそれに関連したあらゆる著作を禁止する教皇令を發布する。²⁰次いで1642年3月6日には前述の通り、教皇勅書が公式の文書として初めて『アウグスチヌス』を断罪する。6月19日、勅書はサン＝ジャン・ド・ラトラン教会に貼り出された。²¹ところがこの後、勅書の真正性が疑われることになる。

フランスにおいてイエズス会士は勅書を単独で出版しただけではなく、ルーヴァンの同僚の論文補遺としても印刷させた。²²これに対して1643年8月、『イプルの司教殿の書で説明された聖アウグスチヌスの教義に関して、数日前から流布されている、いわゆる教書についての見解』が出版された。教書の真正性に疑義を呈したこのテキストは匿名での出版だったが、一般にアルノーが書いたものとされている。²³同じ月の末には、やはりアルノーの手になる『偽の教書について』²⁴が出回る。パリ大司教であるジャン＝フランソワ・ゴンディは、1643年12月21日に命令書を発し、教皇勅書を公にすることを決定し、同時に恩寵に関する議論を禁じようとした。翌年1月15日の定例会において、神学部は勅書の公示と受け入れに難を示し、「教皇勅書で報告された命題を神学部の記録に挿入するだけで十分である」との見解を示した。²⁵要するに、教書の真正性を疑問に付したアルノーの主張が特殊だったわけではなく、むしろ神学部全体が彼の立場に近かったのである。

1644年、アルノーはさらに『教皇教書の難点』を出版する。²⁶アルノーの三つの著作は、『アウグスチヌス』の再版あるいは教皇勅書に関する論争の文脈に位置づけられる。しかし、この3番目の著作の前に、アルノーは『頻繁なる聖体拝領について』を上梓した。1643年のことである。『アウグスチヌス』再版の文脈からすれば、アルノーはそれまでの論争に異質な要素を招き入れたことになる。

以上を簡単に整理すれば、少なくとも三つの論争の文脈が存在している。第一に反イエズス会の文脈、第二に『アウグスチヌス』再版をめぐる論争、第三に教皇勅書の真正性をめぐる論争の文脈である。これらに『頻繁なる聖体拝領について』をめぐる論争が合流することになる。

アントワヌ・アルノーと『頻繁なる聖体拝領について』(1643年刊行)

アントワヌ・アルノー(1612年-1694年)は、1612年に一家の末子として生まれた。後に神学部に登録し、1635年にはバシュリエの論文を提出、1641年には最後の論文も提出した。同じ年の9月には、司祭に叙階されている。1644年3月、アルノーは神学部に在籍しながらも事実上の隠遁生活に入り、以降多くの論争文書を執筆している。

1643年2月1日、サン＝シランは次のようにアルノーに書き送る。「口を開く時がきた。沈黙は罪である。…このような説教²⁷を見過ごしておいてはいけない。とりわけ統率の位置につく総ての人に返答しなくてはならない。」²⁸『頻繁なる聖体拝領について』上梓にあたり、アルノーが得た助言として伝えられる言葉である。歴史家メイエはアルノーの書に、サン＝シランとアルノーのリシュリユに対する怨恨と復讐を見る。²⁹だが心理的解釈はともかく、本書にサン＝シラン思想の展開、そして復讐を裏づける記述を読み込むには注意が必要である。むしろ間テクスト性や思想

の伝達を否定することは原理的にできない。しかしテキスト上、少なくとも字句のレベルでは、復讐はおろかサン-シラン擁護の言説も見あたらないことは確認しておいて良い。

ここで『頻繁なる聖体拝領について』の成立事情をみておこう。ある時、イエズス会士から改悛の秘蹟を得ていたサブレ公夫人と、サン-シランの指導を受けていたゲメネ公夫人は、秘蹟の教義と各々の霊的指導者について語り合っていた。サブレ公夫人は自身の聴罪司祭であるイエズス会のセメゾン神父に、サン-シランの著作とゲメネ公夫人による批判を手渡す。セメゾン神父は同僚たちとともに反駁した。こうしたイエズス会士による批判に論争で応じたのがアルノーの書である。ここでメイエから引用すれば、「サン-シランの教義は、『頻繁なる聖体拝領について』という著名な著作の中で、アルノーによって正しいものとされていた」³⁰。それではメイエの典拠とするゴドフロワ・エルマン（1617年-1691年）は、この書の成立についてどのような記述を残しているだろうか。

非常に身分の高い人物、すなわち、友人である別の夫人から文書を受け取ったゲメネ公夫人に懇願されて、アルノー氏は、真理と慈善に関してと同様、このように急を要する事態にせき立てられて、これ『頻繁なる聖体拝領について』の執筆]を企てたのである。³¹

エルマンの説明には、サン-シランもその教義についても言及がない。サン-シランとアルノーの間の密接な師弟関係は公然のものであるが、エルマンの記述を文字どおり受け取るなら、出版のイニシアチブはアルノーにあった。『頻繁なる聖体拝領について』とサン-シランの教義、あるいはその擁護を結びつける証拠は、少なくとも出版の時点では存在しないか、あるいは暗黙の了解以上のものではなかった。

次に、『頻繁なる聖体拝領について』の刊本を見てみよう。このテキストは、当時の大書籍商アントワヌ・ヴィトレから、42もの承認を付して出版された。³²さらに1643年5月29日付けで王権が発行した出版免許状が挿入されている。

アルノー氏は、王御用達の書籍商であり王母とフランス聖職者会議の書籍商でもあるアントワヌ・ヴィトレに出版免許の権利を委譲し、1643年8月22日にヴィトレが入手した。同年同月26日に印刷終了、王の意志により納本がなされた。³³

承認、出版免許、「王御用達の書籍商であり、王母とフランス聖職者会議の書籍商」という肩書きを有した大書籍商の名、一冊の書籍の出版に、これ以上の格式と権威づけを求めるのは難しい。そのうえこの本は大成功を博し³⁴、後の教皇アレクサンドル七世ことファビオ・キジさえ、アルノーの書を擁護していたのである。³⁵このことは出版当時、この書がジャンセニズムや『アウグスチヌス』の論争文脈ではなく、反イエズス会の文脈で捉えられていたことを示唆している。バルベリニ枢機卿は、ローマから大使のグリマルディに次のように書き送っている『頻繁なる聖体拝領について』という書の中には、イエズス会士に対する敵意の表明、および論争傾向しか見当たらない」と。³⁶

以上を整理すると、第一にアルノーの書は多くの神学博士、高位聖職者らの賛同を得ていたばかりか、出版免許など公的な出版手続きを踏まえ、大書籍商ヴィトレから上梓されている。これは『アウグスチヌス』の再版にも、そしてコンリウスの出版にも共通していることである。要す

るに、一見したところでは矛盾しているが、1641年から1643年までのジャンセニスム運動において、論争を導いていたのは反ジャンセニストではなく反イエズス会勢力であり、アルノー陣営は対立勢力より強大であったか、拮抗していた可能性も高い。第二に、アルノーの発意から、本人の名を冠して公刊された『頻繁なる聖体拝領について』に、少なくとも字句上はサン＝シランを想わせるものはない。それなのに、後世はこの書を発火点とする論争に、「ジャンセニスト派と敵方の公の戦いの始まり」、あるいは「サン＝シランのポール・ロワイアルの最初のマニフェスト」を見る。それならば歴史家は、何を根拠にこうした記述を語り継いでいるのだろうか。

サン＝シランの残像

一般にルーヴェンでの『アウグスチヌス』の出版と、フランスでの再版を区別せずに、この書の引き起こした衝撃とスキャンダルが強調される傾向にあるが、その実、反応、反論という論争のレベルで言えば、アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』が惹起した論争の比ではない。未だ調査段階にあるが、問題をフランスに限るとして、1641年の『アウグスチヌス』の再版に対して、1640年から1643年の間に向けられた反論は、記録で知られるだけの説教を入れても数点にすぎず、それも書物それ自体を標的にした論争書は、或る時期まではほぼ皆無である。それに対して、1643年8月に出版された『頻繁なる聖体拝領について』に関連した論争書は、年内に4文書、1644年だけで40文書以上にもものぼる。但し論争の常として、別の対象を扱いつつアルノーの書に触れているものもあり、正確な数を把握することはほぼ不可能である。しかし1640年代前半には、ジャンセニウスの遺稿よりも、アルノーの書のほうが遥かにインパクトが大きかったことは窺えよう。

ところで、文学研究者を含む後世の歴史家は、論争内容としての思想や教義、あるいは作家や党派の対立に眼を奪われがちだが、『頻繁なる聖体拝領について』が提起したのは「聖体拝領をめぐる解釈や、サン＝シランの甥であるマルタン・ド・バルコスが序文で展開した「教会の二人首長説」³⁷のような教義論争ばかりではなかった。実際、この書の是非をめぐる初期の論争において、焦点は完全に別のところにあった。それこそが、サン＝シランの イメージ 像 をめぐる論争である。

サン＝シラン修道院長こと、ジャン＝アンブロワズ・デュヴェルジエ・ド・オーランヌ（1581年-1643年）は、1581年にバイヨンヌで生まれた。アジャンのイエズス会の学校で学んだ後、パリに移る。1609年にジャンセニウスの知己を得、1616年まで共同研究に勤しんだと伝えられる。1620年にサン＝シラン・アン・ブレンヌの修道院長となる。1624年にアンジェリク・アルノーと出会い、ポール・ロワイアル修道院との関係が始まる。リシュリユと神学の解釈をめぐる論争をしたこともあった。1638年以降、ヴァンセンヌの牢獄に幽閉される。1642年、リシュリユの死に伴い、翌年の2月に釈放されるが、数カ月後の1643年10月11日にその生涯を閉じた。³⁸

経歴を見る限りでは、1641年に牢獄にいたサン＝シランが、『アウグスチヌス』の再版、そして死の2ヶ月前である1643年8月の『頻繁なる聖体拝領について』の出版で何らかの役割を果たしたとはいえない。しかし、この人物は初期ジャンセニスム論争において、前面に押し出されてくることになる。

『頻繁なる聖体拝領について』をめぐる論争の過程で、最初にサン＝シランに言及したのはイエズス会士ジェロム・セガン³⁹である。セガンは1644年、『アルノー氏の神学提要。「頻繁なる聖体拝領について」という書とサン＝シラン修道院長の格言からの抜粋』⁴⁰で、アルノーの教義とサン

ーシランの思想を関連づけ、可視的な形で両者を結びつける。同年4月、やはりイエズス会士でヴォールの司教であるラコニス⁴¹が『頻繁なる聖体拝領に反対して書かれ、ソルボンヌ神学博士であるアルノー氏の名で出版された「頻繁なる聖体拝領について」なる書物の検討と判断』を刊行する。書物の題名が雄弁に語るように（「アルノー氏の名で出版された」）、ラコニスはアルノーが『頻繁なる聖体拝領について』の著者であることに疑義を呈したのである。

もしここで私が信用に値する人たちから仕入れた情報を率直に伝え、しかも〔そう信ずるに足るだけの〕十分でもっともらしい証拠を持っていると考えてさえいるとして、さらにはその証拠では必ずしも、この『頻繁なる聖体拝領』なる著作の主要な著者が、表題紙に記された名前の著者ではないと立証できないとしても、〔実際には〕より相応しい著者〔がいるのです〕。御本人は名乗りせず、子どもの心の中で生きている父親のように、もはや著作と弟子たちの心の中でしか生きていないにせよ〔より相応しい著者がいるというわけです〕。というのも、その人物は自分の精神を弟子たちに注ぎ、弟子たちは師の存命中、とりわけ師を尊敬していたものですから、師が死んだ後、その記憶と遺灰を称えるのに、何も危険にさらすことなどありませんでした*。私が故サンシラン修道院長の話をしているとお察しいただくのに、もはやコメントの必要はないでしょう。私の確信するところでは、氏はとりわけソルボンヌの博士であるアルノー氏に植えつけた格別の尊敬の念に包まれているのです。⁴²

先ほどのセガンが思想あるいは文言のレベルで二人を関連づけたのに対し、ラコニスは証拠を一切提示しないまま、『頻繁なる聖体拝領について』の真の著者がアルノーではなくサンシランであると断言する。こうして論争の渦中に、サンシランの亡霊が彷徨い始めるのだ。

同年、別のイエズス会士フランソワ・パントゥロー⁴³は、『サンシラン氏によって書かれたことが知られている「頻繁なる聖体拝領について」なる書からの命題抜粋』⁴⁴を出版する。パントゥローは疑わしく根拠に乏しい同僚の仮説をそのまま採用する。翌年、再びラコニスが『故サンシラン修道院長とその一味が提示する教義。続編。ソルボンヌの神学博士アルノー氏の名で出版された「教会の伝統」なる書への返答として』を上梓する。⁴⁵『教会の伝統』⁴⁶の正式題名は『改悛と頻繁なる聖体拝領に関する教会の伝統』で、1644年に書籍商ヴィトレが印刷した、アルノーによる教会教父の翻訳抜粋集である。但し、1643年5月29日と8月22日付けの出版允許が付されているため、『頻繁なる聖体拝領について』と同時期に執筆された可能性はある。それはともかく、ラコニスはアルノーが訳した選集にまでサンシランの筆を見るのである。

翌1645年にはアルノー・ダンディイによる献辞のついた、『サンシラン氏のキリスト教的靈的書簡集』⁴⁷が刊行される。1646年、これに対してパントゥローは『サンシラン修道院長、ジャン・デュヴェルジェ・ド・オーランヌ氏の遺物。氏が執筆し公にした著作群からの抜粋。三部構成』と題した書物で返答する。⁴⁸

ダンディイ氏がサンシラン修道院長を記念して公にその ^{イメージ} 像 を打ち立てた後、修道院長に親しかった甥が墓石に壮麗な墓碑銘を刻み込んだ後、修道院長の弟子たちがそれぞれの著作において、院長の神秘的な教えと類い稀な徳を比類なき称賛で褒め称えた後、これ

らすべての後では、読者よ、誰かがあなたに修道院長の遺物をお見せする以外には、もはや他に何も待ち望むものもないでしょう。それこそ、今私にご要望に応え、読者の敬虔な心を満たし、はたまた、この著名な人物について抱くに相応しい敬意に某かの貢献をすべく、本書で手がけることなのです。修道院長が牢獄に放り込まれたのは周知の事実で、歴代の王のうち最も信仰深く正義に満ちた王の命による苦しみを受けているのに、依然として、万人をして信じるべき事柄を信じさせえない状態にあります。修道院長の遺物が正真正銘本物であることを疑われないためにも、そしてその像が虚偽に満ち、墓碑は嘘八百、称賛は捏造であることを疑われないためにも、私はこの人物の髓からでも遺灰からでもなく、その精神でできた記念碑やご本人が公にした教義、そしてわれわれに残された数々の著作から、遺物を取りだそうと思うのです。⁴⁹

パントゥローの狙いは、故サン・シランの偶像破壊に他ならない。イエズス会士たちの連携作業からは、二つの操作が伺えよう。まずは弟子たちにより、まるで聖人であるかのように提示されたサン・シランの偶像を破壊すること、そしてアルノーの書をサン・シランの否定的な像と結びつけること、この二つである。イエズス会士は『頻繁なる聖体拝領について』という書自体、あるいは著者としてのアルノーを直接の標的とせず、とりあえずは故人であるアルノーの師の象徴的価値を貶めようとする。直接の攻撃を避けた理由の一端は、アルノーの書に付された無数の承認、それを通して垣間見える多数の強力な庇護者の存在に求められよう。さらに背後には、フランス聖職者会議が控えている。なぜならヴィトレこそ、フランス聖職者会議公認の書籍商だからである。以上から、仮にアルノー周辺の人々を党派と呼ぶとするなら、その党派は当時、強力かつ多数派であったことが推測できるのである。

初期のジャンセニスム運動において、確かにジャンセニウスとサン・シランの関係、彼らの思想的影響は無視できない。だが論争を通して、『アウグスチヌス』のフランスでの再版および『頻繁なる聖体拝領について』の出版の経緯を追う限り、「ジャンセニスト」という内実の曖昧な「一味」よりも、反イエズス会系統の、かなり強大で党派性を帯びた集団を確認できるのである。さらにこの時期のジャンセニストとは文字どおり、『アウグスチヌス』の著者であるジャンセニウスの擁護者の意であり、サン・シランの薫陶を受けているとはいえ、その集団や「ジャンセニスム」をサン・シランと結びつけるには細心の注意と慎重な手続きを要する。

サン・シランは、リシュリュとの関係から、一般に否定的な存在としてイメージされていた。両者の死後、サン・シラン周辺の人々は師の名誉回復を目指す。実際周辺の人々は、サン・シランをまるで聖人のように扱い、ことあるごとに聖人としてのイメージを広めようとしていた。⁵⁰このような風潮に対して、敵対勢力はアルノーに論争を仕掛けつつ、サン・シランの象徴的価値を貶める戦略をとったのである。その過程で、サン・シランの像がアルノー周辺の党派と結びつけられ、まるで理論的主柱であるかのように表象されていった。それも何ら根拠を提示することなく、サン・シランを『頻繁なる聖体拝領について』の著者に祭り上げるという操作によって。それならば、ジャンセニスム運動といえば毫も疑わずサン・シランとジャンセニウスを論の前提に据える現代のわれわれの常識は、まさしくこの論争の文脈、あるいは反ジャンセニストの論争文書による操作の産物ではないだろうか。確かに、ジャンセニスムにおけるサン・シランの思想の流入あるいは間テクスト性を否定するのは難しいし、およそ無意味なことであろう。だが、サン・シランとジャンセニスムの最初の出会いは、まさに論争の過程で、反ジャンセニストによる操作によって演出

されたのである。

それにしても現代において、アルノーの『頻繁なる聖体拝領について』の著者が疑問に付されることはないのに、当時の論争の文脈では誰の眼にも自明に映った、アルノーの書へのサンシランの介入を、今日の如何なる論者も本気で受けとめないのはなぜだろうか。まるで、暗黙の了解として、当時のイエズス会士の操作が捏造と不誠実の産物であったと言わんばかりである。もちろんイエズス会士に組して、『頻繁なる聖体拝領について』の著者はサンシランであったとか、著者としてのアルノーの独自の営みを否定しようと言うのではない。だが、神学書といえば字句上に現れる教義問題にのみ焦点を合わせ、小説と言えバフィクションを、歴史書には固定さ

れた事実を読み込んでしまう、われわれの読書慣行つまり解釈の^{ブラチック}実践が、ことの正否を常に既に方向付けてしまっているのではないだろうか。著作で展開される論理に著者の思考を見、記述者と記述内容を直線的に結びつけ、題名や著者名、作家の思想性なるものは疑わないのに、そのような前提から外れる様態を探ろうとも複数の文脈で眺めようもしない。本論で論争に着目するのは、こうした従来の方法に対する見方に修正を促してくれるからである。論争研究とは、まさしく複雑したテキスト間の関係を、複数の文脈を同時に射程に入れながら記述するための実験室の役割を目指す営みなのである。

¹本論の中心部分は、パスカル研究会に於ける以下の発表に基づいている。「フランスにおける『アウグスチヌス』の再版と『頻繁なる聖体拝領』の出版」(2013年11月16日、大阪大学にて)。

²「ジャンセニスム」(塩川徹也執筆)『世界大百科事典』平凡社、1998年((c)1998 Hitachi Digital Heibonsha)。

³飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』、東京、未来社、1984、pp.5-9。

⁴御園氏の一連の仕事に関しては、以下の書評で網羅しているため本稿では繰り返さない。野呂康 "Keisuke MISONO, *Écrire contre le jansénisme : Léonard de Marandé, polémiste vulgarisateur*, Honoré Champion, 2012" in 日本フランス語フランス文学会『cahier』, n°13, mars 2014, pp.21-23。

⁵引用は公刊されたフランス語の博士論文ではなく、以下の日本語の論考による。御園敬介『ジャンセニスムと反ジャンセニスム 近世フランスにおける宗教と政治』一橋大学大学院社会学研究科、博士論文(未刊行)、2010年、pp.1-5。御園の問題意識とその透徹した見方に関しては、間然するところがない。だが、以下のように書く時、歴史上のどこかの時点での「ジャンセニスト」を念頭に置いた本質論に陥っていないだろうか。「ジャンセニスムをめぐる様々な出来事は、それを異端視した人々、それもジャンセニストより遙かに多数で強大な陣営を構成した人々によって初めて生み出されたものであり、その歴史を理解するためには、彼ら反ジャンセニストの動向に目を向ける必要がある。」(前掲書、p.4。強調は引用者による)

⁶「ジャンセニウスとサンシランは、周知のように、同等の資格で、フランスにおけるジャンセニスムの鼻祖とみなせよう。」(Albert de Meyer, *Les Premières controverses jansénistes en France(1640-1649)*, Louvain, Veuve Joseph Van Linthout, 1919, p.1)。これが今なお、初期のジャンセニスム論争を扱ったほぼ唯一の研究書第1巻の冒頭句である。メイエはアルノーの『頻繁なる聖体拝領について』についても、次のように記している。「この書の出版は、ジャンセニスト派(le parti janséniste)と敵方の公の戦いの嚆矢をなす。実際この書は、サンシランのポール・ロワイ

アルの最初のマニフェストであり、内的刷新に関する、サン＝シラン修道院長の理論を広めることになる。」(Meyer, *id.*, p.222) 同時代の記述も含め、殊更サン＝シランをジャンセニスムの創設者とする見方は根強い。

⁷ Meyer, *id.*, pp.87-88.

⁸ 同じ書の出版でも、ベルギーとフランスでは出版の意味が異なる。ベルギーでは、独立した社団となることをめざして、大学が世俗の権力と教権の対立を利用したという見方があり、ルーヴァンのジャンセニスムは神学者の道具として機能したとのことである(Toon Quaghebeur, " Quelques caractéristiques de la querelle entre l'Université de Louvain et le Saint-Office sur le jansénisme louvaniste du XVII^e siècle ", in Ralph Dekoninck, Janine Desmulliez et Myriam Watthee-Delmotte(études réunies par), *Controverses et polémiques religieuses Antiquité-Temps Modernes*, L'Harmattan, 2007, pp.87-96)。

⁹ Florent Conrius(1560 ou 1561-1629). 同年(1641年)、大法官セギエと密接な関係にあったカルヴィルもまた、コンリウスの別の著作を出版している。ところで、セギエは当時から一貫して反ジャンセニストとして知られていた点、注意が必要である。

¹⁰ J. Lesaulnier et A. MacKenna dir., *Dictionnaire de Port-Royal*, Paris, Honoré Champion, 2004.

¹¹ Henri-Jean Martin, *Livre, pouvoirs et société à Paris au XVII^e siècle*, Genève, Droz, 1999 (la première édition en 1969), 2 vol., t.I, p.565.

¹² Lucien Ceysens, « Nicolas Cornet (1592-1663), promoteur des cinq propositions jansénistes », (Antonianum, 54, 1977, pp. 395-495), in *Jansenistica minora*, Malines, Saint François, Amsterdam, John Benjamin, 1951-1979, 14 vol, t.XIII, p.139. ジャンセニスム運動に関する情報の多くはセイッサンスの論考に負う。

¹³ *Théologie morale des jésuites et nouveaux casuistes, représentée par leurs pratiques et par leurs livres*, 1643. V. Meyer, *op.cit.*, pp.510 et suiv.

¹⁴ Paul Richard Stravius.

¹⁵ Fabio Chigi(1599-1667).

¹⁶ Meyer, *op.cit.*, pp.121-122.

¹⁷ *Id.*, p.127.

¹⁸ *Id.*, pp.124-126, 138.

¹⁹ *Id.*, p.138.

²⁰ *Id.*, p.126.

²¹ *Id.*, p.130.

²² *Id.*, p.132.

²³ *Id.*, p.132. [A. Arnauld] *Observations sur une bulle prétendue qu'on fait courir depuis peu de jours, touchant la doctrine de saint Augustin expliquée dans le livre de M. l'Evesque d'Ypres.*

²⁴ [A. Arnauld] *Secondes observations sur la fausse bulle qu'on a fait courir depuis quelques temps contre la doctrine de S. Augustin, expliquée dans le livre de M. l'Evesque d'Ypres.*

²⁵ Meyer, *op.cit.*, p.136.

²⁶ [A. Arnauld] *Difficultez sur la bulle qui porte deffense de lire le livre de Cornelius Jansénius évêque d'Ypres, les thèses des jésuites et autres ouvrages sur la matière de la grâce*, Paris 1644, in-12. V. Meyer, *id.*,

p.136.

²⁷ 1642年から翌年にかけて、ノートルダム教会で神学を教授していたイザク・アベールが行った、ジャンセニウスの教義を批判する一連の説教を指す。Isaac Habert(1598-1668).

²⁸ citée par Meyer, *op.cit.*, p.142.

²⁹ Meyer, *id.*, p.222.

³⁰ Meyer, *id.*, pp.222-223. 強調は引用者による。

³¹ G. Hermant, *Mémoires sur l'histoire ecclésiastique du XVII^e siècle*, A. Gazier éd., Paris, Plon, 1905-1910, 6 vol., t.I, pp.211-213.

³² 王権が出版許可として発行するのが「出版允許」であるとすれば、神学者が専門家として出版可否を判断したものが「承認」である。事前検閲が前提であった当時において、王権の出版統制と神学者の判断が時に鋭く対立した。この間の事情とジャンセニストによる「承認」の戦略的利用に関しては、以下の拙稿を参照されたい。「公認か『承認』か - フランス近世出版統制とジャンセニストの出版戦略」(ジャンセニズムと出版允許(4))、成城大学フランス語フランス文化研究会編、『AZUR』、第9号、2008, pp. 55-74.

³³ *De la fréquente communion*, « Extrait du Privilège du Roy ».

³⁴ 「初版は数日で品切れとなり、6ヶ月後には4刷までせねばならなかった。」(Meyer, *op.cit.*, p.243).

³⁵ 1644年4月16日付け手紙(Meyer, *id.*, p.243, n.2).

³⁶ 1644年2月18日付け手紙(Meyer, *id.*, p.422).

³⁷ この説は、1647年1月24日教皇インノケンチウス10世によって、「聖ペトロと聖パウロは教会の二人の首長であり、二人は一つの首位権を作る」という主張は異端であるとされてしまう(Denz.1999)。

³⁸ 目下調査中であるが、現時点ではサン-シランの伝記記述に関しては前掲『ポール・ロワイアル事典』の項目の他、以下の二著に多くを負う。Jean Orcibal, *Les Origines du jansénisme*, t. II « Saint-Cyran et son temps(1581-1638) », Paris, J Vrin, 1947; le même, t. III « Jean Duvergier de Hauranne Abbé de Saint-Cyran et son temps(1581-1638), Appendices, bibliographie et tables », 1948, « Appendice I : Les Sources de la biographie de Saint-Cyran » et « Chronologie » ; le même, *Saint-Cyran et le jansénisme*, Éditions du Seuil, 1961. ところで、私自身未だ明瞭な答えを得るにいたらないが、さすがにオルシバルはサン-シラン=ジャンセニズムという単純化した図式に対して、極めて慎重な姿勢を崩さず、全体としては否定的な見方をしているようである。大家にとって、サン-シランの思想はあくまでジャンセニズムに関わる複数の「起源」の一つであり、それも1638年(つまり入獄)以前とそれ以降に至るまでの活動を慎重に区別して、起源としての思想を抽出している。

³⁹ Jérôme Séguin(1607-1655).

⁴⁰ Jérôme Séguin, *Sommaire de la théologie du sieur Arnould extrait du livre De la fréquente communion et des maximes de l'abbé de Saint-Cyran*, 1644. V. Meyer, *op.cit.*, p.266 ; De Backert et Sommervogel, *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, 1890-1909(reprint, Martino Publishing).

⁴¹ Charles François Abra de Raconis(?-1646). V. Meyer, *op.cit.*, p.315, n.1. メイエによれば、ラコニスが教義に関してアルノーに向けた反論は、そのほとんどが以前の論争家、とりわけイエズス会士プトー神父の著作に見いだせるという(Meyer, *id.*, p.317).

⁴² *Examen et jugement du livre De la fréquente communion fait contre la fréquente communion et publié*

*sous le nom du sieur Arnauld, docteur de Sorbonne. Où est adjoûté un traité très important du directeur solide et apostolique pour opposer au directeur visionnaire de nos nouveaux prophètes. Par messire Charles François d'Abra de Raconis, docteur en théologie, conseiller du roy en ses conseils, prédicateur ordinaire de la reyne, évêque de Lavaur. Paris, Sébastien Cramoisy, imprimeur ordinaire du roy et de la reyne et Gabriel Cramoisy, 1644, Avec permission. In-4, pp.17-18. 引用中、*の原文は以下の通りである。« qui ... n'ont rien obligé pour honorer sa memoire[sic.]...». (強調は引用者による)。斜字体部分には ne sont [pas] obligés [de rien] (「何も強要されることはない」) の誤りではないだろうか。*

⁴³ François Pinthereau(1605-1664).

⁴⁴ [Pinthereau] *Extrait de quelques propositions du livre De la fréquente communion qu'on sait avoir été composé par M. de Saint-Cyran.*

⁴⁵ [Raconis] *Continuation des examens de la doctrine du feu abbé de Saint-Cyran et de sa cabale : pour servir de response au livre de la tradition de l'Église, publié sous le nom du sieur Arnauld, docteur de Sorbonne.* [Par messire Charles-François d'Abra de Raconis]

⁴⁶ A. Arnauld, *Tradition de l'Église sur le sujet de la pénitence et de la fréquente communion : représentée dans les plus excellents ouvrages des SS. Pères grecs et latins et des auteurs célèbres de ces derniers siècles. Traduits en françois par Antoine Arnauld, prestre, docteur en théologie de la maison de Sorbonne, Paris, Antoine Vitré, 1644.*

⁴⁷ [Saint-Cyran] *Lettres chrestiennes et spirituelles de messire Jean du Verger de hauranne abbé de St Cyran. Dédiées à Messeigneurs les illustrissimes et reverendissimes archevesque et evesques de France, Paris, la veuve Martin Durand, Sébastien Huré, Jean le Mire, Rolet le Duc, 1645, avec approbation et permission(épître d'Arnauld d'Andilly daté du 10 mars 1645).* 著者や著作の解釈をめぐる文学研究を別にすれば、出版の意味を確定するのに、死後出版の書籍をサン＝シランの著作として著者目録に列挙するだけでは不十分である。出版は執筆とは別の行為であり、固有の文脈に依存する。その意味で、前掲『ポール・ロワイアル事典』の該当項目の書誌はあくまで作家研究の産物であり、死後論争に巻き込まれたサン＝シランの著作が、なぜ 1645 年に刊行されたのか、その理由を考察する論争研究に資するところは少ない。

⁴⁸ [Pinthereau] *Les Reliques de messire Jean du Verger[sic.] de Hauranne, abbé de Saint-Cyran, extraites des ouvrages qu'il a composez et donnez au public, divisées en trois parties, Louvains, la veuve Jacques Gravius, 1646, In-8.* 「デュヴェルジェ」は当時一般に流布していた綴りで、サン＝シランの墓碑銘にも用いられている(V. Claude Lancelot, *Mémoires touchant la vie de M. de Saint-Cyran*, D. Donetzkoff éd., Nolin, 2003, p.178)。

⁴⁹ [Pinthereau], *id.*, « au lecteur », pp. III-IV. なお、パントゥローには『遺物』の続編および「ジャンセンニスムの誕生」や「展開」を印象づける論争書もあり、神学や教義のオリジナリティはともかくとして、論争の観点からは極めて興味深い論者の一人である。*Nouvelles et anciennes reliques de l'abbé de ... Saint-Cyran*, 1648 ; *La naissance du Janssenisme découverte à Mgr le Chancelier par le sr de Prévile*, 1654 ; *Le progres du Janssenisme desouvert à Mgr le Chancelier par le sieur de Prévile*, 1655.

⁵⁰ 前註の引用文冒頭には、サン＝シランの聖人像が増殖していくことに対するパントゥローの危惧が明瞭に現れている。これはパントゥローの杞憂、あるいは敵愾心にかかられた上での妄想などでは全くない。パントゥローによる前掲書の題名にある「遺物」とは、まさしく聖人の「聖遺物」

を指す語で、ここに「ジャンセニスト側」の操作に対する痛烈な皮肉が表現されているのだ。「列聖」手続きの有無はともかく、「ジャンセニスト側」は実際にサン＝シランを聖人と考えていた。その証拠に、サン＝シランが死去した日の翌日、「当時の習慣に従って」屍体解剖が行われ、その「聖遺物」が仲間内で分配されている (C. Lancelot, *op.cit.*, p.173)。パスカルを含むポール・ロワイアル関係者の間で共有されていた独特な聖人・聖遺物崇敬のあり方に関しては、以下の拙論を参照されたい。「パスカルの宗教思想 — 「私の父」の死とテキストとしての『手紙』」、日本フランス語フランス文学会編『フランス語フランス文学研究』、第73号、1998、pp. 3-12；「カグワシキカオリの共同体 — パスカルと聖遺物崇敬」、日本フランス語フランス文学会関東支部編『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、第7号、1998、pp. 41-58.